

## <追悼文>新崎盛暉さんとの47年

著者	西 泉
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	47
ページ	467-472
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00023273">http://hdl.handle.net/10114/00023273</a>

## 新崎盛暉さんとの47年

西 泉

那覇の栄町を歩いていたら、新崎盛暉さんによく似た人とすれ違った。背丈は新崎さんより小さいが、顔の輪郭や髪型、そしてなによりも少年がこれからいたずらをする前にわくわくしている、そんな目が似ていたのである。「西、早くこの原稿を書き上げなければ編集スタッフに迷惑をかけるじゃないか」と笑いながら言っているような、あの目。

「僕はねえ、タクシーの運転手に不思議がられるんだ。出張から帰って、空港からタクシーに乗るだろ。しゃべりは100%東京弁なのに、バックミラーに映る顔はどう見てもウチナンチュだから」と笑いながら話していたのを思い出す。

新崎さんは強面と表現される方がいる。そういう一面が無かったとはいえぬが、僕はあまりそういうふうを感じたことがない。豊かなユーモア感覚の持ち主だったと思う。

沖縄に来て一年目ぐらいの頃だから、1989年ぐらいだろう。何人かが集まる、もあいの席だったかもしれない。僕はすこし得意げに「沖縄に来ると日本がよく見えます」と発言した。新崎さんは

とつさに「西には日本が良く見える、か」と返してきた。僕はこの「ユーモア」に赤面した。彼のユーモアは、いくぶん皮肉が混ざっていることもあるので、爆笑することではなくとも人をニヤリと、そしてこの場合はヒヤリとさせる質をもつのである。

僕は、沖繩に来て、沖繩の女性と結婚をし、子どもが生まれた。その頃、近くの食堂で昼食をともにするようになった。

昼食時、「子ども好きだと思ったことがなかったんです。でも自分に子どもができたからか、最近結構子ども好きなんだなと思えるようになりました」と、述べると、新崎さんはすかさず「子どもが小さい頃はいいんだよ。ところがだんだん子どもが大きくなるだろ。そうするとまたそれほど子ども好きでなくなるんだ」と応答された。まさかそんなはずはありえない、と「子ども好き」になり始めた僕は思った。ところが、こどもが18になり、20になる頃になると、僕の「子ども好き」は後退を続けた。新崎さんは、率直に真実を語り得る人なのである。

彼に率直な言葉で真剣に怒られたことが一度だけある。新崎さんが学外研修で一年間沖繩大学を離れている間のことだった。教養学科の学科長だった僕は、政治学を担当する非常勤講師をA氏からB氏に、僕のイニシアチブで変更した。沖繩大学に戻られた新崎さんは、はっきりとした口調で「僕に相談せずによくこんなことができたものだ」と言われた。学科長としては、教養科目については学科の会議を通せば良いのだと思っていたのだが、「政治学」に関してはそうではなかったのである。い

まから考えると、そりやそうだと納得できる話しである。

新崎さんが学長時代のことである。教授会でTさんが異論を述べた。新崎さんは、「Tさんは、どうしてあんなことを言うのかわからないなあ。話しに行ってくる」と僕に言い、Tさんの研究室に向かった。研究室で、率直にとことん意見を交換したと思う。

とことん言葉で理解しあう、とことん言葉で付き合う、という態度を僕は新崎さんから学んだ。そしてこれこそが、民主主義の基本的な態度であろう。彼はそれでも一度、「民主主義には限界があるから」と小さな、私的な集まりで述べていた。言葉で真剣に付き合った後の「限界」とはなんなのか、それを乗り越える方策はどのようなものなのか、新崎さんに訊いてみようと思っていたが、今ではそれも不可能となった。

新崎さんには大学運営の基本を、それはテクニクを弄しない骨太の原理・原則だったが、を毎月の教授会で教わった。会議が深夜を超える日もあった。そんなある日、事務職の人が心配して、マクドナルドのハンバーガーを会議出席者全員に配ってくれた。そのときのマクドナルドは極上の味だった。

僕が新崎盛暉さんに初めて会ったのは1972年の秋である。彼は、都立国立高校の学園祭に招かれ、「沖縄返還」について講演をした。その高校の1年生であった僕は、それに出席したのである。この年の学園祭は、9月29日金曜日から10月1日日曜日までであった。金、土、日のうちのどの一日

であったかは記憶にないが、講演のことははっきりと覚えている。聴衆は20名程度であった。「沖縄問題」に特段の関心を抱いていたわけでもない僕は、それでも中野好夫氏との共著である『沖縄問題二十年』（岩波新書）を読んで参加した。しかしながら、この著作の内容も講演の内容もはっきり覚えていない。覚えているのは、うつむきながら語る新崎さんの姿だけである。講演後の、少人数で講師を囲む会にも参加した。その中の何人かは、ある党派の人であることがあとで判明する。

ある晩、電話がかかってきたのである。「先日の新崎盛暉講演会に参加したx x xです。共産同ブントですが：興味があれば、会って話しませんか。共産党とは違います。両者の違い、わかりますか？」という、聞きようによっては失礼な誘いの電話であった。「わかりますよ」と言いたい誘惑にかられたが、受話器を握りながら僕は黙っていた。そんな時代だったのである。

初めて新崎さんに出合ってから今年で47年目である。この文章の題を「新崎盛暉さんとの47年」とさせてもらったのはこのような理由である。もちろん彼とより近くでより頻繁に接するようになったのは、1988年に僕が沖縄大学に赴任してからである。その前年、二人の共通の友人／知人を介して沖縄大学に来ないかと誘われたとき、まず思い浮かんだのは、うつむきながら「沖縄返還」について語っていた新崎盛暉さんのことであった。あの人が学長を務めるぐらいなら大丈夫だ、とそこそこ東京の短期大学に職を得ていた僕は考えた。その直感はいまでも基本的に間違っていなかったと思う。

僕が最も好きな彼の本は、有斐閣から出版されている『日本になった沖縄』（1987/2009）である。

アマゾンでこの書籍のページを開くと一つの短評が載っていた。「数ある新崎盛暉氏の本の中で、個人的な意見であるが、最高傑作のひとつである。ある種の熱がこもっている。この点を共有する、彼のもう一冊を挙げるならば、『日本にとって沖縄とは何か』（岩波新書）であろう。」いかにもえらそうな評だな、とこのページを見たとき思った。評者のペンネームがEとなっていた。「いり」は沖縄語で「西」の意である。その瞬間、この生意気な評を書いたのは私であることを思いだした。恥ずかしい限りである。

この本の主題は同化思想についてだ。戦前、東京で軍人以外の人がそのようなことをしていない時期から沖縄では男たちがすでにゲートルを巻いていたという一節が特に印象に残っている。

実はマサチューセッツ州、ケンブリッジのホテルでこの文章を書いている。学会が開かれているMIT（マサチューセッツ工科大学）から歩いてホテルまでさきほど戻ってきた。MITでは生成文法理論に基づく言語学の研究発表を聞いていた。高校時代、川本茂雄氏が『朝日ジャーナル』に載せたチョムスキーを紹介する論文が言語学に対する興味の端緒となった。

ノーム・チョムスキーと新崎盛暉は、僕の人生をここまで牽引してきた人である。今後もこの二人は、僕の人生を牽引し続けていくものと思われる。

## 【注】

- (1) これを調べていただいたのは、東京都立国立高等学校副校長の北沢氏と同窓会の事務を担当されている栗原氏である。お二人に感謝申し上げます。